

即興で話す力を育成する中学校外国語科学習指導の工夫

— 英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を通して —

三原市立第五中学校 小廣川 和恵

研究の要約

本研究は、即興で話す力を育成する学習指導の工夫について考察したものである。文献研究から、本研究では、中学校段階における「即興で話す力」を「興味・関心のある事柄について、伝える内容を重視し、事前準備をすることなく、簡単な語句や文を用いて、その場で話すことができる力」とした。この力を育成するために、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を行った。具体的には、①「スピーチの形式」に沿い、トピックに関する「英語のキーワード」をメモしながら、話す内容をイメージすることを通して、②「英語のキーワード」を基に自分の考えや経験等と関連付ける等、話す内容を膨らませながら、話す内容を構成する指導を行った。その結果、即興で話す力を高めることができた。このことから、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動は、即興で話す力を育成することに有効であることが分かった。

キーワード：即興 英語のキーワード impromptu speech

I 研究題目設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年）外国語の「話すこと〔発表〕」の目標には、「（ア）関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。」¹⁾とあり、身の回りのことで生徒が共通して関心をもっていることについて、既習の語句や文を用いて、その場で話すことができるようにすることが求められている。

平成28年度「英語教育改善のための英語力調査事業（中学校）報告書」によると、調査を受けた生徒のうち「約70%の生徒は、与えられた質問についてある程度の準備をした上で、個人の考えや経験に基づいて、意見、理由などの要素を関連付けながら考えを述べることに課題がある。」²⁾ということが明らかになった。また、所属校では、第1学年「話すこと」のパフォーマンステスト（ALTへの自己紹介）を行ったところ、約60%の生徒が事前に書いた原稿を読んで発表しており、書いた英文に頼った発話となったという実態があった。これらのことから、原稿を書いてから話すのではなく、既習の語句や文を用いて、その場で考えて話すための指導の工夫が必要であると考ええる。

そこで、本研究では、生徒が英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を提案する。与えられたトピックについて事前に準備

することなく話すためには、話す内容をその場で構成する必要がある。手立てとして、話す内容を構成する際に、スピーチの形式に沿って、英語のキーワードでメモすることを指導する。具体的には、日本語で話す内容を考えてから英語に変換するのではなく、英語で考えて表現できるようにするために、トピックに関する英語のキーワードを基に、話す内容をイメージさせる。そして、英語のキーワードを書いたメモを基に、自分の考えや経験等と関連付けながら、話す内容を膨らませ、英語表現の幅を広げさせる。さらに、聞き手に分かりやすく伝えることができるように、英語のキーワードを基に話す内容を整理しながら即興的に話す練習を行わせる。このように、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を取り入れれば、即興で話す力が高まると考え、本研究題目を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 「即興で話す力」を育成することについて

(1) 「即興で話す力」とは

高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編（平成22年、以下「高等学校解説」とする。）には、「『即興で話す』とは、準備時間をとることなく、不適切

な間をおかずに、事実や意見、感情などを相手に伝えることである。」³⁾とある。また、中学校学習指導要領解説外国語編（平成29年、以下「29年中学校解説」とする。）では、即興で話すことについて、

「事前に原稿を書いてそれを暗唱したりするのではなく、興味・関心のある事柄であれば、既習の知識や技能を生かしてその場で話せるようにする必要がある。」⁴⁾と述べられており、即興で話すことができるように指導することが求められている。

平木裕（平成27年）は、話すことの授業改善の方向性を示す中で、話す活動の前に書かせる等、準備させすぎていないかという指摘に加え、「その場で伝えることに大きな意味があり、正確な英語を使用することができたかどうかよりも、どのような内容を伝えることができたか、を大切にしてほしい。」⁵⁾と、話す際における英語の正確さよりもコミュニケーションの目的として伝える内容を重視することについて述べている。

以上のことを踏まえ、本研究では、中学校段階における「即興で話す力」を、「興味・関心のある事柄について、伝える内容を重視し、事前準備をすることなく、簡単な語句や文を用いて、その場で話すことができる力」とする。

(2) 「即興で話す力」を育成するために

「高等学校解説」では、即興で話す力の育成に向けた指導の現状について、「即興で事実や意見、感情などを伝えることは、しばしば生徒にとって難しい。」⁶⁾とし、現実のコミュニケーションの場において、文章を頭の中で組み立てる時間の確保の難しさについて述べている。「29年中学校解説」では、即興で話す力を育成するプロセスについて、「即興で話す力については、一度の授業や言語活動で身に付くものではない。1年生から即興で話す活動に継続的に取り組ませることで、即興で話す力を高めていく必要がある。（中略）学習した語句や表現などに意味のある文脈の中で繰り返し触れることができるようにしながら、様々な話題についてその場で英語を話すことに慣れていくことが大切である。」⁷⁾と示している。

したがって、「即興で話す力」を育成するためには、発達段階に応じて様々なトピックを与え、生徒が話す内容を頭の中で組み立てることができるような手立てを講じながら、段階的に訓練していく必要があると考える。

2 impromptu speechについて

(1) impromptu speechとは

本多敏幸（2009）によると、impromptu speechとは「その場で与えられたテーマについて行う即興のスピーチ」を意味し、それに対して、あらかじめ原稿を準備して行うのは、prepared speechであるとしている⁽¹⁾。また、Don Henderson(1982)は、impromptu speechの内容について、制限時間と一定の準備を伴った、シンプルで形式のあるスピーキング練習であると述べている⁽²⁾。

これらのことから、本研究における“impromptu speech”を、「その場で与えられたトピックについて、話す内容を構成する時間を1分、スピーチをする時間を1分と設定して行う即興のスピーチ」とする。

(2) impromptu speechの活用について

野村和宏（2011）は、「スピーチ能力育成のためにimpromptu speechスタイルを用いて即興で制限時間内にスピーチをまとめる練習をすることがある。実社会で質問されてすぐに答える場面は多くあるため、impromptu speechの能力を身につけることは大切である。」⁸⁾と、授業におけるimpromptu speechの効用を述べている。

表1は、野村（2011）の考えを基に、prepared speechとimpromptu speechの長所と短所について筆者がまとめたものである。

表1 スピーチのスタイルによる長所・短所

スタイル	長 所	短 所
prepared speech	・語彙や表現を調べることができる ・話す内容を推敲できる ・覚えることで自信がもてる	・記憶が途絶える恐れがある ・覚えたことにより感情が希薄になる可能性がある
impromptu speech	・即興で話す準備が不要 ・自然な発話が期待できる ・短い時間でまとめる訓練となる	・構成や展開が練られていない ・発言間違いが生じやすい ・文法や語彙に誤りが生じやすい

prepared speechの利点として、思考を整理して論理的な文章を組み立てた上で話すことができることが挙げられるが、即興性が身に付きにくい。それに対し、原稿を準備することなく行うimpromptu speechは、より実社会におけるコミュニケーションに近い状況で話すことになるが、内容が練られていない分、発話の正確さが不十分な点も考えられる。

これらのことから、即興で話す力を育成することを目的とするときには、impromptu speechの学習体験を積み重ねることを通して学習効果が高まると考える。

(3) impromptu speechを取り入れた指導について

工藤洋路(2013)は、即興で行うimpromptu speechの難しさを取り上げた上で、即興で英語を話すために、プロセスを踏んで練習することの必要性を述べている⁽³⁾。

工藤(2013)によると、英語で話す際には、まず言いたいことを思い浮かべ、言語化するために加工作業を行う段階と、それを英語でどう言うか処理する段階があるとしている。具体的には、第1段階として、言いたいことが言葉の場合だけでなく、抽象的なアイデアや感情・欲求という心理状態の場合もあるとし、それを英語で話すために、簡単な語に置き換えたり、要点だけに内容を絞ったりする必要があるとしている。次に、言いたいことを英語でどう言うかを処理するのが第2段階で、定型表現でなければ自分でオリジナルの文を作るために文法力や表現力を駆使することになり、時間がかかるとしている。この二つのプロセスを瞬時に行うことができれば、impromptu speechが可能となると述べている⁽⁴⁾。

図1は、本研究における即興で英語を話すためのプロセスについて、工藤(2013)の考えを基に筆者が整理したものである。

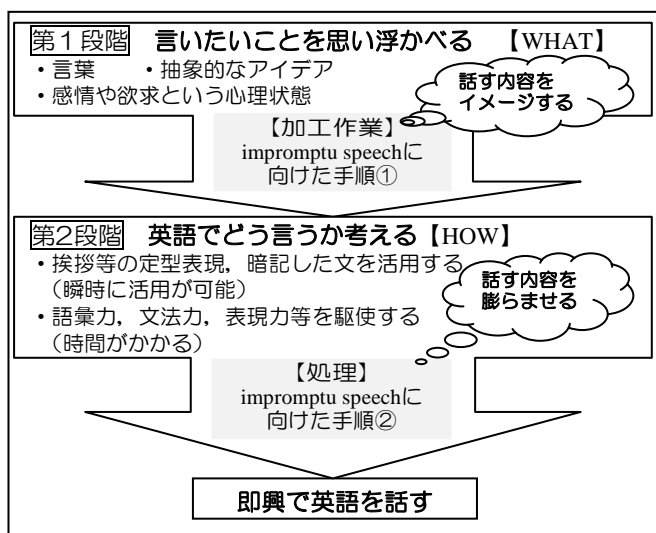


図1 即興で英語を話すためのプロセス

これらのことから、即興で話す力を育成するために、話す内容をイメージする段階と、話す内容を膨らませる段階を通して指導することが考えられる。そこで、即興で話す力を育成する手段として、impromptu speechに向けた手順を踏み、それぞれの段階で、話す内容を構成するための手立てを加えて指導することとする。

3 「英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動」について

(1) 「スピーチの形式」と「話す内容」について

松浦伸和(平成26年)は、外国語表現の能力における「話すこと」の評価の対象として、表現形式と表現内容を挙げている⁽⁵⁾。つまり、話す能力を育成するためには、表現形式と表現内容の指導が必要であるといえる。

表現形式について、松浦(平成26年)は、「中学生が英語でスピーチをする際には、文章構成面からは、『導入・展開・まとめ』で十分であろう。」⁹⁾と、英語のスピーチ構成の型を身に付けることを述べており、このことは即興で英語を話す力を育成する手立てとなると考える。

表現内容については、「『外国語表現の能力』では、表現する内容について情報や意見を取捨選択したり整理する際に思考・判断を伴う。」¹⁰⁾と述べており、思考・判断の際には、対比、順序、関連、類推等を伴う活動をさせることの必要性についても明示している。具体的には、話の流れを順序立てたり、自分のことと関連付けて考えたりすることが挙げられる。つまり、事実や特徴を具体例や理由と共に述べたり、考えや感想と関連付けたりすることを通して、情報や意見を取捨選択したり整理したりすることができる。と考える。

以上のことから、本研究では、表現形式を「スピーチの形式」、表現内容を「話す内容」とし、「導入・展開・まとめ」のスピーチの形式に沿って、事実や特徴からその具体例や理由、考えや感想へと内容を膨らませながら話すことを、話す内容を構成することとする。なお、「スピーチの形式」が「話す内容」の支えとなると考える。

(2) 「英語のキーワード」を基に話す内容を構成することについて

ア 「英語のキーワード」について

「29年中学校解説」には、メモやキーワードを頼りにしながらであっても即興で発表すれば、多少の誤りやたどたどしさがあるのは当然であるという認識について述べられている⁽⁶⁾。また、吉澤孝幸(2017)は、即興で話すということは、中学生にとっては難しいことなので、即興で話す段階への橋渡しとなる手段が必要であると述べている。具体的には、話の流れやまとまりを大まかにイメージして伝えるために、単語レベルでメモを書き、そのメモに基づいて発話することの有効性を述べている⁽⁷⁾。これらのことから、即興で話すためには、メモやキーワードが

重要な役割を担うといえる。

平木裕(平成28年)は、その場で考えて話すための言語活動の工夫について述べる中で、日本語でメモすることは、英語による思考・判断・表現の妨げとなる可能性を示唆し、日本語ではなく英語でメモすることを改善の方向性として挙げている⁽⁸⁾。つまり、日本語で話す内容を考えてから英語に変換するのではなく、直接英語で考えて表現できることが求められているといえる。よって、話す内容のポイントをメモする際には、「英語のキーワード」を基にすることを重視する。

これらのことから、即興で話す力を育成するために、「英語のキーワード」を基に話す内容を構成させることとする。

イ 「英語のキーワード」に係る語彙の習得について

「29年中学校解説」には、語彙に関して、生徒の発達段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるようにすべき語彙(受容語彙)と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙(発信語彙)とがあるとしている⁽⁹⁾。そこで、話す力を高めるためには、生徒が「関心のある事柄」について、いかに発信語彙を獲得していくかが重要な要素となると考える。

例えば、予め核となる語彙や表現を示していく。人物紹介であれば、その人物が得意なことを表す動詞句、人物の性格を表す形容詞等を紹介したり、辞書を活用して生徒オリジナルの語彙のファイルを作成させたりする。このように、使用頻度の高い語彙を生徒に選択させたり調べさせたりすることが、英語のキーワードを習得する手立てとなると考える。

(3) 「英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動」を取り入れた指導の工夫について

“impromptu speech”活動を行うための指導として、「英語のキーワード」を基に話す内容を構成する際の二つの段階を、図1の「即興で英語を話すためのプロセス」を参照し、表2のようにまとめた。

そして、表2に示す段階を重視した「英語のキー

表2 「英語のキーワード」を基に話す内容を構成する段階

第1段階	【「英語のキーワード」を基に、話す内容をイメージする】スピーチの形式に沿い、トピックに関する「英語のキーワード」をメモしながら、話す内容をイメージする。また、つながりやまとまりを把握する。
第2段階	【「英語のキーワード」を基に、話す内容を膨らませる】「英語のキーワード」を基に口頭で英文を作り、自分の考えや経験等と関連付ける等、話す内容を広げたり深めたりしながら膨らませる。

ワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動」の構想図を図2に示す。

以下のアとイに、この二つの段階の指導内容を示す。

ア 「『英語のキーワード』を基に話す内容をイメージする」について

第1段階では、まず、「スピーチの形式」の「導入・展開・まとめ」に沿って、「英語のキーワード」を基に話す内容を構成するための視点を与える。具体的には、導入では「トピック紹介」、展開では「事実や特徴」とその「具体例や理由」、まとめでは「考えや感想」を述べることを示すとともに、スピーチの際の挨拶等の定型表現を紹介する。

次に、話す内容をイメージする手立てとして、「スピーチの形式」に沿い、「英語のキーワード」の例を挙げ、「スピーチの形式」と「英語のキーワード」の役割を考えさせる。表3は、“My Friend”のトピックを例に、事実と具体例を中心に紹介するパターン①と特徴と理由を中心に紹介するパターン②について、示したものである。

表3 「スピーチの形式」に沿った「英語のキーワード」の例

【スピーチの形式】構成の視点	パターン①	パターン②
【導入】 トピック紹介	best friend	classmate
【展開】 事実や特徴 具体例や理由	baseball [事実] pitcher [具体例]	kind [特徴] help [理由]
【まとめ】 考えや感想	cool	good friend

このように、第1段階として、「スピーチの形式」に沿って、話す内容を取捨選択しながら「英語のキーワード」でメモすることで、「話す内容」が可視化される。この時、話す順番が整理され、スピーチの流れがイメージでき、全体として内容のつながりや、まとまりを把握する手立てとなると考える。

イ 「『英語のキーワード』を基に話す内容を膨らませる」について

第2段階では、「英語のキーワード」から浮かぶ英文を生徒に挙げさせる。例えば、パターン①では、友だちを紹介する際に、展開部分の英語のキーワード“baseball”からは、野球部に入っていること、具体例として“pitcher”からは、速い球を投げて試合で活躍していること等を挙げるのが可能である。さらに、一緒に野球をしてきた経験を語ることもできる。

このように、「英語のキーワード」を基に話す内容を膨らませることで、事実や特徴からその具体例や理由、考えや感想へと、話す内容を広げたり深め



図2 英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動の構想図

たりしながら話すことができると考える。

以上のアとイの段階を通して「英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動」を行い、即興で話す力を高めることを目指す。(4)

“impromptu speech”活動の指導計画について

投野由紀夫(2018)は、即興での発表活動の現状について、中学校レベルで身の回りの簡単なことが言える活動に適した題材を十分に経験させないまま、中学校後半で社会的な問題について意見を言わせる傾向があるということを述べている⁽¹⁰⁾。このことは、簡単なトピックで即興的に話す力が付かないままに、高度な内容を話すことに取り組ませていることを指摘していると捉えることができる。

そこで、発達段階に応じて即興で話す力を高めるために、“impromptu speech”活動を通して留意することを次の2点にまとめる。

- ①話す内容の質を計画的に高めていくこと
- ②話す手立てを段階的にはずしていくこと

この2点を通し、話す内容の質を高めるために、学習が進むにつれて語彙や表現を増やしつつ、計画的にトピックを与え、話す内容に広がりや深まりをもたせることを重視する。また、トピックをスパイラルに繰り返す中で、話す内容を構成する時間やメモの活用等の手立てを段階的にはずしていき、即興性を高めていくことができると考える。

以上の(1)から(4)より、「英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動」を行い、即興で話す力を高めることができると考える。

III 研究の仮説及び検証の視点と方法

1 研究の仮説

英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を行えば、即興で話す力を高めることができるだろう。

2 検証の視点と方法

検証の視点と方法を表4に示す。

表4 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
即興で話す力が高まったか。	プレテスト ポストテスト
英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動は、即興で話す力を育成することの有効であったか。	事後アンケート 自己評価表 「英語のキーワード」メモ

IV 研究授業について

1 研究授業の内容

期 間	平成29年12月 7 日～平成29年12月15日
対 象	所属校第1 学年 3 組・4 組（プレテスト・ポストテストを受けた生徒36人を調査対象とした）
単元名	Project 2 スピーチをしよう
目 標	人物紹介について、即興でスピーチすることができるようになる。

2 指導計画（全6時間）

次 時	学習活動
一 2	<p>【“impromptu speech”に向けた手順を理解する】</p> <p>○モデルスピーチを視聴し、「英語のキーワード」の例を基に、分かりやすいスピーチの構成を考える</p> <p>・第1段階:「スピーチの形式」に沿った「英語のキーワード」の役割について考える</p> <p>・第2段階:「英語のキーワード」を基に、事実や特徴からその具体例や理由、考えや感想へと話す内容を膨らませながら話す方法を知る</p> <p>○“impromptu speech”活動と気付きの交流</p>
二 2	<p>【「英語のキーワード」を基に、話す内容を構成する】</p> <p>○情報収集のためのインタビュー活動</p> <p>○第1段階:「英語のキーワード」を基に、話す内容をイメージする練習</p> <p>・「スピーチの形式」に沿い、トピックに関する「英語のキーワード」をメモする</p> <p>・つながりやまとまりを把握する</p> <p>○第2段階:「英語のキーワード」を基に、話す内容を膨らませる練習</p> <p>・「英語のキーワード」を基に口頭で英文を作る</p> <p>・自分の考えや経験等と関連付ける等、話す内容を広げたり深めたりする</p> <p>○“impromptu speech”活動と気付きの交流</p>
三 1	<p>【“impromptu speech”活動】</p> <p>・ペアを変えて活動を繰り返す</p> <p>・トピックを変えて活動を繰り返す</p>
四 1	○“impromptu speech”ポストテスト

V 研究授業の分析と考察

1 即興で話す力が高まったか

(1) プレテスト・ポストテストからの分析

プレテスト・ポストテストは、表5に示すトピックと状況設定で“impromptu speech”を実施した。検証は、「スピーチの形式」と「話す内容」の2項目で行い、両項目のB評価以上が、本研究の到達目標を概ね達成したと考える。なお、「スピーチの形式」は「話す内容」の支えとなると捉えているため、相関関係についても検証する。

表5 プレテスト・ポストテストの内容

テスト	トピック	状況設定
プレ	Ms. Melody	来年度入学してくる小学校6年生にALTを紹介する
ポスト	My Favorite Person	自分のお気に入りの人物についてALTを紹介する

ア 「スピーチの形式」による分析

「スピーチの形式」による判断基準を表6に、テストの結果を図3に示す。

表6 「スピーチの形式」による判断基準

評価	判断基準
A	「導入・展開・まとめ」に沿って話している。また、定型表現を効果的に用いている。
B	「導入・展開・まとめ」に沿って話している。
C	「導入・展開・まとめ」に沿って話していない。

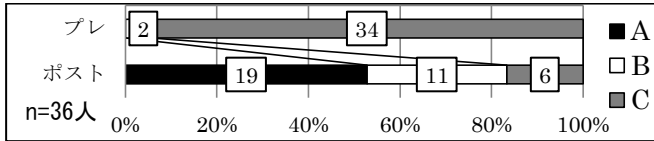


図3 「スピーチの形式」に沿った発話に関する結果

プレテストでは、「導入・展開・まとめ」の流れで発話できていた生徒が2人しかいなかったが、ポストテストでは、30人の生徒が「導入・展開・まとめ」に沿ってまとまりよくスピーチしていた。

指導に当たって、「導入・展開・まとめ」の流れで「英語のキーワード」をメモし、話す内容を構成させたことで、話す内容のポイントが可視化され、「英語のキーワード」から話す内容をイメージしながら、まとまりよく話すことができるようになったと考える。

一方で、C評価だった生徒が6人いた。そのうち4人は「導入・展開」までは話していたが、途中でつまってしまい、時間切れのために「まとめ」まで話すことができなかった。また1人は挨拶の後でつまってしまい、もう1人は無言のままだった。振り返りでは、「頭の中でイメージできても、単語が出てこなかった。」と記していた。今後の手立てとして、トピックに関する語彙のカードを複数用意し、「導入・展開・まとめ」に沿って、「英語のキーワード」を選択させることで、話す内容をイメージできるように支援したい。

イ 「話す内容」による分析

「話す内容」による判断基準を表7に、テストの結果を図4に示す。

表7 「話す内容」による判断基準

評価	判断基準
A	事実や特徴とその具体例や理由等を述べ、自分の考えや経験と関連付けながら、内容を膨らませて話している。
B	事実や特徴とその具体例や理由等を述べ、内容を膨らませながら話している。
C	事実や特徴の具体例や理由等を述べていない。

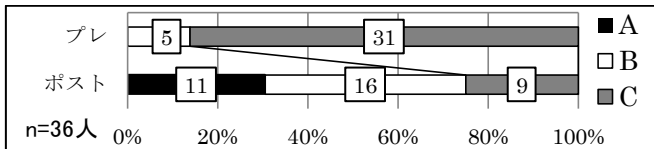


図4 「話す内容」に関する結果

プレテストでは、「話す内容」について、事実や特徴とその具体例や理由を述べ、内容を膨らませて話していた生徒は5人しかいなかったが、ポストテストでは27人が「話す内容」を意識してスピーチしていた。その中で、「話す内容」に広がりや深まりがあったA評価の生徒は11人いた。B評価からA評価に変化した生徒aの発話を図5に示す。

プレテスト	導入	She is English teacher.	【トピック紹介】
	展開	She like sports. She likes animal too. She likes dog.	【事実】 【事実】 【具体例】
	まとめ	She is very cute. She is very funny.	【考え・感想】
ポストテスト	導入	Hello. My friend is Chihiro.	定型表現 【トピック紹介】
	展開	Chihiro is a member music club. Music club is practice very hard. She can play the trumpet. She is good at play the trumpet. I can't trumpet.	【事実】 内容の広がり 【具体例】 内容の深まり
	まとめ	She is cheerful and friendly. I like her very much. That's all. Thank you for listening. Goodbye.	【考え・感想】 理由とともに 定型表現

※太字はメモに書いた英語のキーワードを示す

図5 B評価からA評価に変化した生徒aの発話内容

生徒aのポストテストでは、音楽部に入っている友だちについて、事実に加えて部活の様子を述べたり、友だちが演奏する楽器について自分との関連を述べたりして、内容を膨らませていた。プレテストとポストテストを比較すると、ポストテストでは事実や具体例、考えや感想に内容の広がりや深まりがあることがわかる。文法的な間違いや語彙の過不足が多少あるが、理解するには支障がないと思われる。これらのことから、「英語のキーワード」を基に「話す内容」を膨らませる練習を行ったことで、「話す内容」が充実してきたと考える。

一方で、C評価だった9人については、そのうち8人は「英語のキーワード」を基に内容を伝えようとしていたが、事実や特徴についての具体例や理由を述べていなかったり、理解が難しい発話であった。1人は無言のままだった。「話す内容」がC評価の生徒bの発話を表8に示す。

表8 「話す内容」がC評価の生徒bの発話内容

プレテスト		Ms. Melody...from Japan...You like... English. ... Melody happy. ... English ...
ポストテスト	導入	Hello. Mr. Nishikawa, my friend.
	展開	He is play table tennis. ... He like card game. He ... He like 果物 fruits ...He like fruits.
	まとめ	I like him.

※太字はメモに書いた英語のキーワードを示す。

生徒bのように、「英語のキーワード」から文を組み立てたり、内容を広げたりすることができていない生徒は、基本的な知識・技能の習得を踏まえることが大切であると考ええる。また、事前にマッピング等を用いて内容を関連付ける方法を指導した上で“impromptu speech”活動に取り組みせ、「英語のキーワード」を基に話す内容を膨らませることができるように支援していきたい。

ウ 「スピーチの形式」と「話す内容」についてのクロス集計結果による分析

表9は、ポストテストにおける「スピーチの形式」と「話す内容」についてのクロス集計結果である。

表9 ポストテストにおける評価のクロス集計結果

形式 内容	A	B	C	計(人)
A	9	2	0	11
B	10	6	0	16
C	0	3	6	9
計(人)	19	11	6	36

クロス集計より、「スピーチの形式」と「話す内容」の両方ともB評価以上の生徒は36人中27人(75%)だった。特徴として、「話す内容」の評価がB評価以上の生徒は全員「スピーチの形式」もB評価以上だったことが挙げられる。つまり、「スピーチの形式」を土台として「話す内容」を構成したと捉えることができる。

B評価以上の生徒の事後アンケートには、「構成がわかったので、キーワードを書くことによって話す内容が思い浮かぶようになった。」「スピーチの形式に沿ってイメージすることで、言う内容がスラスラ出てきた。」等の感想があった。これらのことから、「スピーチの形式」を踏まえて「英語のキーワード」を基に「話す内容」を膨らませながら話したことが分かる。

よって、「スピーチの形式」と「話す内容」は相関関係にあり、「スピーチの形式」を踏まえて「話す内容」を膨らませる指導を行うことは、即興で話す力を高めることに効果的であると考ええる。

以上、ア、イ、ウの分析から、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動を通して、即興で話す力を高めることに一定の成果があったと考える。

2 英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動は、即興で話す力を育成することに有効であったか

(1) 授業後の自己評価による分析

図6は、検証授業における“impromptu speech”活動の自己評価項目「英語のキーワードを基に話す内容を膨らませながら、口頭で英文を作ることができた」について、第1回と第5回の結果を比較したものである。

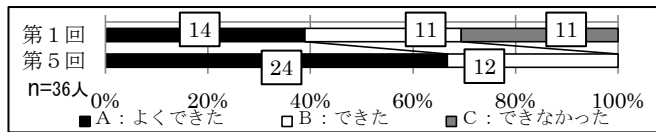


図6 “impromptu speech”活動の自己評価

第1回は、C評価が11人おり、できなかったと思った生徒が33%いたが、第5回では全員がB評価以上だった。振り返りの記述では、「前回よりも長く話せるようになった。長く話せると、話すことが楽しいと感じた。もっと頑張って長く話せるようになりたい。」等とあった。即興で話す力を実感したことから、話す意欲も高まったことが分かる。意欲の高まりが、更に即興で話す力を伸ばすことにつながると考える。

(2) 「英語のキーワード」のメモと事後アンケートによる分析

図7は、生徒cのプレテストとポストテストの際のメモの変化である。プレでは日本語のキーワードを思いつくまま羅列しているが、ポストではスピーチの形式に沿って「英語のキーワード」を挙げている。

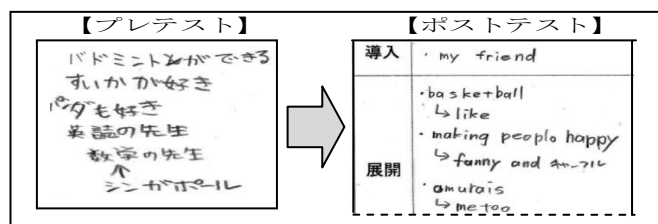


図7 プレテスト・ポストテストのメモの変化

生徒cの事後アンケートの記述に、「日本語から英語に直さずに言えて、スラスラと話せた。また、英語のキーワードから文が作れて、話しやすかった。」とあった。このことから、日本語で話す内容を考えてから英語に変換するのではなく、英語で考えて表現することができたことが分かる。よって、「英語のキーワード」を用いることは、即興で話す際に効果的であると捉える。

以上の(1)(2)から、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動は、即興で話す力を育成する手段として有効であったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

- 即興で話す力を育成する上で、英語のキーワードを基に話す内容を構成する“impromptu speech”活動は有効であることが分かった。

2 研究の課題

- 「英語のキーワード」を基に話す内容を膨らませることができなかった生徒への手立てとして、事前にマッピング等を用いて内容を関連付ける方法を指導した上で“impromptu speech”活動に取り組ませ、話す内容を広げたり深めたりすることができるように支援を行う。
- 即興で話す力を高めるためには、発達段階に応じて系統的な指導を行う必要がある。今後は、小学校・高等学校との接続を考慮した“impromptu speech”活動の指導計画を作成し、実践していきたい。

【注】

- (1) 本多敏幸(2009):「スピーキング」金谷憲編『英語授業ハンドブック』大修館書店p.177を参照されたい。
- (2) Don Henderson(1982):「Impromptu speaking as a tool to improve non-native speakers' fluency in English」『JALT Journal』Vol.4 p.76を参照されたい。
- (3) 工藤洋路(2013):「impromptu」話す活動の実践に向けて『TEACHING ENGLISH NOW』Vol.25 SUMMER三省堂p.10を参照されたい。
- (4) 工藤洋路(2013):前掲書pp.10-11に詳しい。
- (5) 松浦伸和(平成26年):「英語科における『思考・判断・表現』の評価に関する研究」日本教材文化研究財団p.9に詳しい。
- (6) 文部科学省(平成29年):『中学校学習指導要領解説外国語編』p.23を参照されたい。
- (7) 吉澤孝幸(2017):『英語情報』2017夏号 公益財団法人日本英語検定協会p.19に詳しい。
- (8) 平木裕(平成28年):「中学校外国語における指導の充実(30)」『中等教育資料』4月号 学事出版pp.72-73を参照されたい。
- (9) 文部科学省(平成29年):前掲書pp.32-33に詳しい。
- (10) 投野由紀夫(2018):「CEFRに基づく『やり取り』と『発表』の違い」『英語教育』大修館書店p.11を参照されたい。

【引用文献】

- 1) 文部科学省(平成29年):『中学校学習指導要領』p.130
- 2) 文部科学省(平成28年):『平成28年度「英語教育改善のための英語力調査事業(中学校)」報告書』p.22
- 3) 文部科学省(平成22年):『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』開隆堂p.26
- 4) 文部科学省(平成29年):『中学校学習指導要領解説外国語編』p.23
- 5) 平木裕(平成27年):「中学校外国語における指導の充実(27)」『中等教育資料』11月号 学事出版p.69
- 6) 文部科学省(平成22年):前掲書p.26
- 7) 文部科学省(平成29年):前掲書p.23
- 8) 野村和宏(2011):「マクロタスクに基づくパブリック・スピーキング能力の養成」『神戸大論叢』62巻第2号pp.119-120
- 9) 松浦伸和(平成26年):「英語科における『思考・判断・表現』の評価に関する研究」日本教材文化研究財団p.11
- 10) 松浦伸和(平成26年):前掲書p.9